

# 京都フィロムジカ管弦楽団 第43回定期演奏会

2018年6月24日(日) 午後2時開演 京都府長岡京記念文化会館

《 曲 目 》

## メンデルスゾーン/序曲『ヘブリディーズ諸島 (フィンガルの洞窟)』

Felix Mendelssohn Bartholdy : Ouverture "Die Hebriden" Op. 26

## 別宮 貞雄/第3交響曲『春』

Bekku, Sadao : Troisième Symphonie "Le Printemps"

第1楽章 : 「春の訪れ」

第2楽章 : 「花は咲き、蝶は舞い…」

第3楽章 : 「人は踊る」

— 休憩 —

## ラフ/交響曲第3番『森にて』

Joachim Raff : Sinfonie Nr. 3 "Im Walde" Op. 153

I. ABTHEILUNG : Am Tage

第1部 : 「昼間に」

II. ABTHEILUNG : In der Dämmerung

第2部 : 「夕暮れ時」

III. ABTHEILUNG : Nachts

第3部 : 「夜」

指揮 : 中村 晃之

京都芸術センター制作支援事業

## お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- 「せきエチケット」にご協力ください。せき、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のどあめ」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

# 指揮者

## 中村 晃之 (なかむら てるゆき)



1962 年生まれ。京都府出身。

関西学院大学在学中より本格的に指揮を学び、大友直人、湯浅卓雄氏の副指揮者を務めた。指揮法を小松一彦、小林研一郎、クルト・レーデル、パスカル・ヴェロ各氏のマスタークラス等において学ぶ。1997 年、彩の国さいたま芸術劇場で開催されたクルト・レーデル指揮講習会コンクールにて第二位奨励賞を受賞。

1988～2008 年、かぶとやま交響楽団（兵庫県西宮市）指揮者。  
2010～2011 年、みなとフィルハーモニー（東京都港区）音楽監督。  
2014～2018 年、杜の都 合奏団（宮城県仙台市）指揮者。

最近では 2017 年から 2018 年にかけて演奏された、マーラー交響曲連続演奏会（第 5 番、第 9 番）において特に好評を博した。並行して仙台、関西、首都圏の社会人オーケストラで、積極的に客演指揮や指導を行っている。

## ♪ ロビーコンサート ♪

午後 1 時 15 分より

### 石毛 里佳 / 『碧い月の神話』

フルート：

3 楽章構成の 5 分程度の曲で、アンサンブルコンクールでも演奏されますが、かなり難しい曲です。拍子を取りづらく、一瞬でも気が抜けません。

裏拍から激しく始まる 1 楽章は最後のルバート以外は一気に駆け抜けます。一転して 2 楽章はゆったりと 2nd の中低音のメロディから始まり、たゆたう旋律が美しく奏でられます。3 楽章は印象的な 3rd のソロに始まり、スイング調の vivace は 1 st の 3 連符のメロディが軽快に鳴り、短い間に曲は変化していき、決然と終わりを迎えます。

皆様に楽しんでいただけるよう、心をこめて演奏します。

### 酒井 格 / 『The Seventh Night of July たなばた』

トランペット：

ホルン：

トロンボーン：

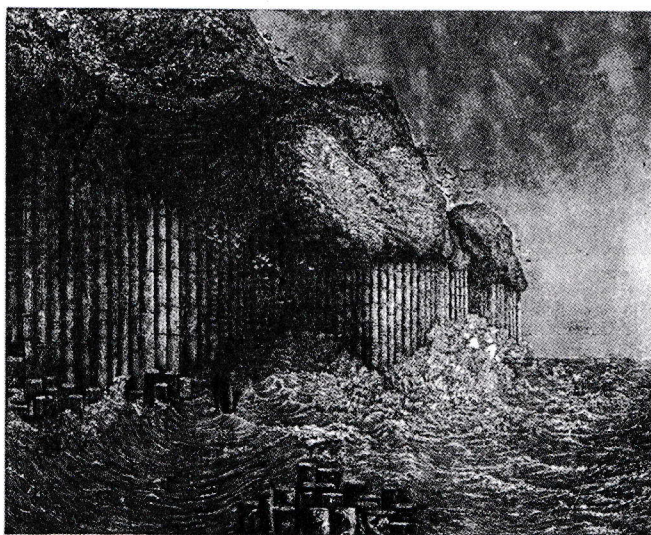
本日の演奏会が終わると 2 週間後にはこの日がやってくるという事で、時節柄「たなばた」というタイトルの作品を取り上げることにしました。作曲者の酒井格は枚方市出身という事もあり、織姫彦星伝説の発祥の地にちなんでタイトルを自身初の吹奏楽作品につけました。作曲者が部活で親しんだ多くの吹奏楽作品のモチーフが、まるで天の川を流れ星が駆け抜けるようにあちらこちらに散りばめられており、非常に親しみやすい作品です。本日は、作曲者自身による金管五重奏編曲版でお楽しみいただきます。

# 曲目解説

遠藤 啓輔(トランペット)

## メンデルスゾーン／序曲『ヘブリディーズ諸島』

メンデルスゾーン(1809-1847)は20歳のときから足掛け3年にも及ぶ大旅行をし、その際にスコットランドを訪問する。ベルリン屈指の知的な家庭で育ち、文学の素養も豊かだったメンデルスゾーンは、スコットランドに伝わる古謡などを通して、美しくも厳しい自然の中に歴史が息づくこの地に思いを馳せていた。そしてスコットランド沖にあるヘブリディーズ諸島にも渡り、そこにある名所・フィンガルの洞窟をも訪れ、湧き上がる楽想たちを書き留めていった。



フィンガルの洞窟

フィンガルの洞窟は、自然が生み出した奇景である。火山から流れ出した溶岩が冷え固まってできた

玄武岩には、柱状節理と呼ばれる規則正しい六角柱状の割れ目ができる。フィンガルの洞窟は、そうした六角形の柱が海に面して林立しており、さながら自然が生み出した海中の大聖堂、といった趣を呈している。

演奏会用序曲の『ヘブリディーズ諸島』は、こうした訪問先で喚起されたイメージをもとに書かれているようで、荒々しい波の表現に始まり、洞窟内を反響する不気味な音や、吟遊詩人の昔語りのような温かな歌などが交錯する。メンデルスゾーンは旅行中の1830年にこの曲を完成させるが、2年後の初演までの間にたびたび改訂した。現在、一般的に演奏されているのは最終的な改訂版で、本日も改訂版で演奏する。なお、作曲者自身は『ヘブリディーズ諸島』と題したが、より著名な地名である『フィンガルの洞窟』の名で呼ばれることも多く、特に日本ではこの通称で通っている。

## 別宮 貞雄／第3交響曲『春』

フィロムジカは過去に、別宮貞雄の第3交響曲の第1楽章だけを演奏したことがある。この曲は1979年から作曲が始められるが、ちょうどそのころに別宮は、記念音楽会のための作品を委嘱された。そこで別宮は、作曲中だった第3交響曲の第1楽章のみをまず完成させ、『祝典序曲』の名前を付けてその記念音楽会で初演(1981年)。第2楽章以降はそれに続いて作曲され、交響曲全体が完成し初演されたのは1984年のことであった。フィロムジカは第8回定期(2000年12月10日)で、この『祝典序曲』を演奏したのだ。

当時、別宮は存命だったのだが(2012年逝去)、その時の指揮者である金子建志先生は、生前の別宮の印象について次のように書いている。「私は仕事の関係もあってコンサートに出かけることが多いが、意外に顔を合わせる機会が少ないのが作曲家である。もちろん現代曲や初演の新作が並んだような会は別で、(中略)一般向きのコンサートで見かけるような常連的な顔ぶれは皆無になる代わりに、普段あまり見かけない作曲家諸先生と、その弟子筋がロビーで談笑するということになる。そうした中で(中略)別宮氏は、作曲家でありながら両方のタイプのコンサートによく足を運んでいる珍しい存在なので、直接の面識はないものの、いつの間にやら顔だけは覚えてしまった。」簡潔なこの一文に、実は別宮という作曲家の本質が現れている。別宮は1922年に東京で生まれたが、少年時代を西宮で過ごした。音楽大学には進学せず、東京大学の理学部と文学部で学ぶ。特に

重要なのは、理学部時代に理論物理学を専攻していたということ。理論を徹底追及した人だからこそかえって、理論だけは立派だが聴いても感銘を受けない作品や作曲家(例えばクセナキスなど)を批判した。また、学生時代に書いた作品がコンクール入選に伴って実際に演奏され、「いい音がする」と自ら感じたことが作曲家となる決心につながったという。こうしたエピソードから、別宮が音楽について、演奏され聴かれたうえで、それによって聴衆が抱いた直感こそが重要である、と考えていたであろうことがうかがえる。別宮がコンサート会場の常連であったという事実がその証明であろう。

別宮はモーツァルトやベートーベンなどドイツの古典音楽を熱愛する一方、フランス音楽にも惹かれてフランスへ留学。第3交響曲『春』は留学後の作品だが、自分自身の独創性を出そうということに拘泥せず、自分が書きたいものを素直に書こうとしたという。それがかえって、素直な喜びにあふれた傑作の誕生へとつながったのだろう。

第1楽章は「春の訪れ(あつという間に春はやってくる)」とのタイトルが付けられている。赤倉という所で春スキーをしているときに着想を得たという。変拍子が多用されているが、心に浮かぶ旋律をそのまま書き留めたら結果的に変拍子だった、といったおもむきの、自然な流れを持っている。

第2楽章のタイトルは「花は咲き、蝶は舞い…(そして鳥がさえずる。深い山の中の自然の美しさ)」。深山幽谷の中で時間を忘れるような風情がある。木管による鳥の声の模倣は、別宮自身も気に入っていたという。

終楽章の第3楽章は、「人は踊る(人々は浮かれ出す)」のタイトル通り、躍動的なパワーが炸裂する。変拍子満載の第1楽章とは逆に、規則的に音楽が展開するが、ごく稀に忍び込んでいるシンコペーションや変拍子が、かえって強烈な印象を与える。理論と、聴衆の感じ方、その双方を徹底追及した別宮の面目躍如と言うべき見事な作曲技法だ。

[参考文献] 別宮貞雄『音楽に魅せられて 作曲生活40年』音楽之友社、1995

## ラフ／交響曲第3番『森にて』

フィロムジカの演奏会を毎回聴いて下さっている方は、第37回定期演奏会(2015年6月28日)で演奏したラフ作曲の交響曲第2番を覚えていて下さることだろう。ラフは、スイスのドイツ語圏地域であるチューリヒ近郊の湖畔の村で1822年に生まれ、1882年に死去するまでドイツで活躍した。ほぼ独学で音楽を修めるが、メンデルスゾーン、リスト、ビューローらに実力を認められた。特にリストは、1850年から56年までラフを助手として雇い、自作のオーケストレーション、パート譜の写譜、手稿譜の整理、編曲などの実務をラフに担わせた。こうしてラフは現場で音楽の実力を身に付けていった。作曲家としては遅咲きながらも、11番まである交響曲をはじめとする膨大な作品を残した。ドイツ内外で名声を博し、ヴァーグナーやブラームスと並び称されたといい、R.シュトラウスやブルッフ、そしてチャイコフスキーらに影響を与えた。

ラフの交響曲第3番は、『森にて(*Im Walde*)』の表題を持つ。森を表すドイツ語は、Wald(Walde)のほかにもForstがあるが、特に「Wald」には「辺境」や「境界」の意味が含まれているという。この音楽に描かれた「森(Walde)」は、戦争などの過酷な現実を忘れることができる人里離れた地であり、人間の世界と神々の世界の境界領域とも言うべき空間なのであろう。

ソナタ形式による堂々たる両端楽章の間に、緩徐楽章と舞曲を挟んだ、交響曲の王道と言うべき4楽章構成を取る。ただし少し変わっているのは、各楽章にも付された表題によって、この曲は3部構成であると明記されていることだ(注)。第1楽章が第1部、緩徐楽章と舞曲をひとまとめにして第2部、終楽章が第3部となる。

このようなまとめ方をしたのは、「昼間(第1部)」「夕暮れ時(第2部)」「夜(第3部)」という時系列に従って森の1日を表現したかったからだろう。

第1部は *Am Tage* と題されている。僕は外国語が全くできないので正確さには自信がないが、前述のように「昼間に」という意味のようだ。そして、「自然の光の中で」という意味も含まれているらしい。さらに副題として *Eindrücke und Empfindungen*(印象と感情)と書かれている。木々の隙間から降り注ぐ光を浴びながら森を散策した、その印象と感動を描いているのだろうか。実際、健康的な明るさを持った、心躍る音楽である。また、クレッシェンドとディミヌエンドの雄大な繰り返しが印象的である。寄せては返す大波のようで、森というよりは海を連想させる。しかしこれは、「森」の表題と少しも矛盾するものではない。なぜなら、ドイツにおいて、広大で深い森は、しばしば海になぞらえられるからだ。

第2部は、*In der Dämmerung* と題される。「薄暗がりに」という、早朝をも夕方をも指す語らしいが、前後の楽章の順序にしたがえば「夕暮れ時」となる。同時に、「夢うつつ」といったような意味もあるらしい。

第2部の前半は緩徐楽章で、*largo* という広がりのあるテンポ指定がなされている。*Traumerei*(トロイメライ)という副題が付けられている。シューマンの有名なピアノ曲の表題にも使われているこの語は、「夢」と訳される。実際この楽章は、簡潔なオーケストラが繊りなす柔らかな音楽が夢の世界へと誘ってくれるようだ。しかし、あまりの美しさが、かえって不気味でもある。副題にこだわってみると、*Traumerei* には「白昼夢」の意味もあるようだ。そして、日常語として定着した感がある心理学用語の「トラウマ」と同系統の語であることを思うと、単に甘美な夢というだけでは済まされない。現実離れた事象たちがひたひたと迫ってくるようで、そら恐ろしさをも感じさせる。その不穏な雰囲気は第2部の後半で決定的になる。

第2部の後半は動的な舞曲。序奏が始まって間もなく、ヴァイオリンが譜例1を弾くが、これが独特の印象を残す。まるでマーラー『巨人』の冒頭動機(譜例2)を先取りしているかのようだ。マーラーがラフの影響を受けた可能性もあるが、しかし僕がここで問題にしたいのは両者の影響関係ではない。これらの動機に共通する原始的・土俗的な雰囲気だ。作曲家・柴田南雄は譜例2と民族音楽の関連性を指摘し、「西欧以前、あるいは非西欧世界への親近性、それへの指向、を感じさせる」と言う。マーラーは特に青年時代に、非西欧的世界にインスピレーションを得て作曲したのだが、ラフはそれを先取りしていたと言えるのだ。この第2部後半の舞曲には、*Tanz der Dryaden*なる副題が付けられている。「ドリユアスたちの踊り」という意味であり、「ドリユアス」とは、ギリシャ神話における樹々に宿るニンフ(女神)たちのことだ。こうした妖精のごとき存在は、一神教のキリスト教とは相容れないものである。しかしヨーロッパ各地には、キリスト教以前の魑魅魍魎ちみもろうりょうごめ 信仰世界が、民間の習俗として生き延びているという。この楽章の主部は、柔らかな音が縦横無尽に飛び回っているようで、愛らしい妖精たちの軽快な踊りを思わせる。しかし中間部は甘美な歌に変貌し、ニンフたちの危険な誘惑を描いているようで、ちょっと怖い。

森の散策に疲れた夕暮  
れ時、つつい午睡し、  
夢想から目覚めたら魑魅  
魍魎の世界に連れて来ら  
れていた、ということだ



譜例1 ラフ・第2部後半より



譜例2 マーラー『巨人』より

ろうか。日本でも、昼でも夜でもない夕暮れ時のことを、悪魔に出会う時間という意味で「逢魔おうまが時」と呼んで恐れたが、この第2部にも同じような恐ろしさがある。このようにして森の様相は、キリスト教以前の原始的・土俗的世界へと変貌していくのである。

終曲の第3部は *Nachts* と題されている。「夜」や「暗闇」といった意味である。そして第3部には詩のように長い副題が添えられている。

副題にはまず、*Stilles Weben der Nacht im Walde*. とある。「森の夜陰に、静謐という名の織物が敷き渡される」とでも訳したら良いのだろうか。ドイツの人たちは、森の静寂に対して、人間の侵入する余地のない、まるで教会の中にいるような神聖さを感じるという。いや、そもそも聖堂の内部の静けさは、森の静けさを再現したものだとも言う。この楽章の第1主題は4小節フレーズを基本単位にした落ち着いたもので、低弦から順に演奏され積み重ねられていき、安定感がある。それが安心感につながり、心の静謐を実現してくれる。

しかし第2主題は、3小節フレーズを基本単位とした、躍動的かつ扇情的な音楽に豹変する。副題の中盤部分、*Einzug und Auszug der wilden Jagd mit Frau Holle (Hulda) und Wotan*. を表現しているのだろう。wilden Jagdは「荒ぶる狩人たち」、Einzug und Auszugは「到着と出発」の意味だから、荒くれ者たちが突然現れては一瞬で走り去っていく、疾風怒濤の様相が想像される。そして、その「荒ぶる狩人たち」を率いているのは、「ホレおぼさん(別名をフルダ)」や「ヴォータン」である。いずれも北欧神話やゲルマン神話の神々で、ゴータやオーディンなどの神々とも同種の存在と言われる。特に「ヴォータン」は、ヴァーグナー愛好者の皆さんにはお馴染みだろう。ゲルマン神話の最高神にして、自然の怒りの象徴とも言うべき「嵐の神」である。そして、年末年始に、狩猟を司る神々や死霊たちを率いて疾駆する冬の神、死の神であるが、同時に、厳しい冬を



譜例3 ラフ・第3部より



譜例4 ヴァーグナー『ジークフリート』より

乗り越えた後には豊饒な穀物をもたらしてくれる農耕の神、復活・再生の神でもある。ホレおぼさん(フルダ)もヴォータンと同様の役割を持っているが、加えて、勤勉な者には財や幸福を与えるが、怠け者には罰を与える、優しくとも恐ろしい神である。さらに、最も始原的な創造活動とも言うべき「糸紡ぎ」を司る神でもあることから、世界の創造神に等しい存在感を持つ。攻撃的かつ威圧的な音楽は、このようなフルダやヴォータンの圧倒的破壊力や存在感を見事に表現している。トロンボーンを中心とする低音が豪放に登場し(譜例3)、トランペットの荒々しいファンファーレが野卑な彩りを添える。余談だが、僕は当初、譜例3はヴァーグナーの楽劇『ジークフリート』の主題(譜例4)の引用だと思っていたが、それは誤りだった。ラフのこの曲が作曲されたのは1869年なのに対し、『ジークフリート』の初演は1876年だからだ。かといって、逆にヴァーグナーがラフを引用したというわけでもなさそうだ。『ジークフリート』は、ラフの第3交響曲が作曲されるずっと前の1851年ごろから、ほぼ15年がかりで作曲されたものだからだ。なお、ラフが助手として仕えたりストは、ヴァーグナーの義父となる人である。彼らの間に音楽面で影響を与え合う関係でもあったのだろうか？

そして、副題の末尾には、*Anbruch des Tages*. と記される。「夜明け」と訳されるが、特に anbruchには「始まり」という意味がある。夜明けとともに、再生した新しい命が始まる、そのような標題にふさわしい、感動的なコーダが鳴り響く。

[参考文献]柴田南雄『グスタフ・マーラー』岩波新書、1984/高橋義人『ドイツ人のこころ』岩波新書、1993/高橋義人『グリム童話の世界—ヨーロッパ文化の深層へ』岩波新書、2006/大野寿子『黒い森のグリム—ドイツ的なフォークロア』郁文堂、2008

(注) 楽譜には各楽章の冒頭に「I. ABTHEILUNG」「II. ABTHEILUNG」「III. ABTHEILUNG」と書かれているが、「abteilung」という単語はドイツ語辞典でも見つけられなかった。似た綴りの「abteilung」(「部」といったような意味)のことではないかと類推した。

# 京都フィロムジカ管弦楽団

## Philomusica Orchester Kyoto

---

---

### 客演コンサートミストレス 坂 茉莉江

1989年、大阪生まれ。相愛大学音楽学部を特別奨学生で卒業。モーツァルテウム音楽大学大学院を満場一致の最優秀にて修了。第60回全日本学生音楽コンクール大阪大会高校の部第1位、並びに全国大会第3位、大阪国際音楽コンクール高校の部第2位、第3回神戸新人音楽賞コンクール優秀賞などを受賞。「モーツァルト生誕250周年記念関西フィルコンサート」にて故羽田健太郎氏のピアノと共演、「オーストリア・ボーデンゼーフェスティバル」にてファジル・サイ氏のピアノと共演する。

これまでにソリストとして関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団と共演、多数のアマチュアオーケストラとも共演を重ねる。2016年ザ・フェニックスホールにて「第66回朝の光のクラシック」坂茉莉江ヴァイオリンリサイタルを開催。

中島美子、本多智子、小栗まち絵、大谷玲子、イゴール・オジム、ウオンジ・キム・オジムの各氏に師事。2015年9月、日本に帰国し、ソロ、室内楽奏者として幅広く活動している。

### 弦トレーナー 岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

### 管トレーナー 山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC、マクベス、A、ハーゼス、M、アンドレの各氏に師事。

---

## 京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(5月現在)  
新規会員募集中です。詳しくは裏表紙をご覧ください。

### 謝 辞

今回、友の会の皆様のご支援によりまして、長年の懸案でありました大太鼓の購入をついに実現することができました。この場を借りまして、団員一同、心より御礼申し上げます。

# 京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

## ♪第44回定期演奏会♪

2018年12月23日(日) びわ湖ホール(大ホール) 指揮：池田 俊

ラフマニノフ/ユース・シンフォニー

ブルックナー/交響曲第5番

(予定)

## ♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいきます。「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。遠方からの参加も歓迎します。関西地区以外の方々もご興味があればぜひご連絡ください！

### <募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス (**ヴァイオリン・ヴィオラ急募！**)

オーボエ・ファゴット(**ファゴット急募！**)

ホルン・トランペット / 打楽器(※打楽器は諸条件について要相談)

〔参加資格〕 特にありませんが練習に出席できること。学生の参加も歓迎します。

〔練習日時〕 原則日曜日(午後1～5時)、春と秋に合宿練習(大津市内)

〔練習場所〕 京都芸術センター、伏見区など京都市内の各所のほか、大津市など。

〔諸費用〕 団費3000円/月(学生は1000円)、演奏会参加費など

※遠距離割引、学生割引、家族割引などあり(ご相談ください)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: [recruit@kyotophilo.com](mailto:recruit@kyotophilo.com)

## ♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円

【期間】 ご入会いただいた月より1年間

- 【特典】
1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
  2. その他演奏活動のご案内
  3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel & Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: [tomo@kyotophilo.com](mailto:tomo@kyotophilo.com)

## 京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。